
一生分の恋。

たまご

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

一生分の恋。

【Nコード】

N9900D

【作者名】

たまご

【あらすじ】

中学から大学までの男女の恋物語。

— 1 —

あれは大学の合格発表日だった。

俺は受験票をにぎりしめて開示を待っていた。

ふと周りを見渡すと、進学校の田丸高校の女生徒が同じく受験票を持って開示を待っていた。

髪が長くて顔ははっきりとは見えなかったが、可愛い感じの人で、どこも無く懐かしさを感じる。

いや、そんな事今はどうでも良い。

進学校だろうが何だろうが俺は絶対に受かる。

2159、2159…

あっ…！

「あった！」

女生徒と同時に声を発した。

あまりの一致にびっくりして女生徒を見ると、女生徒が髪をかき上げながらゆっくりとこちらに振り返った。

その瞬間、運命を感じた。

中学時代に恋い焦がれた、ことしはぎえ事柴基恵だった。

「事…柴…さん…？」

「あれ、田邊だ。」

久し振りだねー。三年振りくらいになるのかな。

全然連絡ないからすごく気になってたんだよ。

：田邊も受かってたみたいだね：オメデト」

事柴さんはあの時と変わらない笑顔で話しかけて来た。

俺は電撃にうたれたような感覚に陥って、返す言葉も見つからないまま彼女を見つめた。

「でもホント、こんなトコで会えるなんてねえ。
：運命だったりして。」

そうだ。

これは運命だったんだ。

ラブストーリーは突然に、なんてバカバカしくて嫌いだったけど、ホントに突然だ。

嫌いとか言ったら小田和正に悪い。

彼女は予期しなかった時に突然現れたんだ。

体が自然と動く。

そして事柴さんを強く抱きしめた。

「たな…」

「事柴さん、俺と付き合ってくれないかな。」

三年越しの告白だった。

学年集会の日だった。

雨が降っているのにわざわざ武道場に移動なんて、正直かつたるい。

俺、田邊大輔はそう思いながら、友人であり不良でもある蔵本と話をしていた。

現在中学二年。

これといった趣味もなければ彼女だっていない。

学校に通って、部活をして、塾に行って。
そんな毎日だった。

でも、ことしばきえ気になる人はいる。

事柴基恵、美術部部长。

特に美人な訳ではない。

どっちかというと微妙なタイプ。

今までだったら絶対に好きにならないタイプだ。

でも何故か気になる。

初めて近くで見たのは、学活の時に蔵本の所に行って、何の係になるか話していた時だった。

彼女は保健副委員長もしていたから、学級委員ではなく、優先的に学級係になる。

暇そうにぼんやりと教室を眺めている彼女が印象的だった。

「ナベ、ナベって！
聞いてんの？」

蔵本の言葉にはっとした。

「ナベまた坂井に見とれてたんじゃないの？」

蔵本がけらけら笑いながら言った。

冗談じゃない。

蔵本が言った「坂井」とはうちのクラスの女子で、今時の女の子って感じ。

クラスで一番可愛いって言っても過言じゃない。

「考え事してたんだよ。」

「はいはい。」

で、ナベ好きな人は?!

クラス変わったし、何人かいるだろう?!

背の順に並んで座っていたので隣は事柴さんだった。

焦る。

いつタラシになったって言うんだよ。

「何人もしねえよ」

「まずナベは坂井が好きだろー?」

そう、これだ。一番困る。

勝手に好きな人にされてしまったんだ。

「違うって言ってんじゃん」

でも蔵本は聞く耳を持たない。

「じゃあ二番目に好きな人はー？」

ふと思った。

隣に座っている彼女が好きなのもしれない、と。

この会話を聞いていないことを祈って、名前を呼んだ。

「事柴さん。」

返事は横からやって来た。

「…何？」

あからさまに嫌そうな顔をして返事をした。

田邊ってタラシだから危ないって聞いた。

私は可愛くないから大丈夫と思ってたけど…女なら誰でも良いんだ。
正直見損なった。

二番目に好きな人？

冗談じゃない。

坂井さんも良い迷惑だよ…。

「何でもないよ！」

蔵本はそう言って、俺との会話を続けた。

正直、その会話はほとんど聞いていなかった。

いつもそうだ。

彼女は男子が嫌いなんだろうか。

女子との会話でしか笑ったところを見たことがない。

少なくとも俺はかなり嫌そうな顔をされる。

タラシだって噂が耳に届いているんだろうかと思うと、やるせなさ
が募っていった。

俺は水泳部だった。

と言っても真面目にしてるわけでもなく、ただプールサイドで遊んでるだけだったが。

もちろんシーズン中は真面目にやってたよ、一応。

そしてその部長（男）は保健委員長だった。

もしかしたら事柴さんと接触できるかもしれない。

でも事柴さんは男子が嫌いみたいだから、部長の所に行っても意味ないかもしれない…。

「中島君」

俺は部長を小声で呼びながら、そっと生徒会室のドアを開けた。

すると思いがけない光景が目に入った。

事柴さんが部長と談笑している。

あんな笑顔見たことがなかった。

正直部長が羨ましかった。

すると部長は俺に気付いてくれた。

「ごめん、ちょっと抜けるから、先に仕事してもらってて良いかな？
絶対戻ってくるから。」

事柴さんが笑顔で返事をした。

「はい。」

何なんだ、この光景は。

「田邊？聞いてる？」

聞いてなかった。

「もちろんですよ！」

「じゃあそういうわけだから、自主練ね。
面倒なら帰っても良いから。」

部長のお墨付きを貰った。

今日、美術室デビューを飾ろう。

実を言うと、事柴さんが生徒会室を出て美術室に向かうとき軽く睨まれたのだ。

何か共通の話題は…。

「ねえ、きーちゃん」

部員の井口久美が迷惑そうな声を上げた。

「何、どうしたの？」

「田邊が美術室前うろついてんだけど…」

「ええ？」

久美は一年のとき田邊と同じクラスだった。

コイツがタラシだっていうのも久美から教えてもらったこと。

「よし、私がいっぱつガツンと言ってこよう！」

「ごめんよきーちゃん…」

何がしたいんだ田邊は。

そう思いながら私は部室のドアを開けた。

事柴さんが部室から出て来た。

明らかな仏頂面。

もどがそんなに可愛い訳じゃないから、どっちかと言うとギャグっぽい。

ひと睨みして彼女は口を開けた。

「…何の用？」

共通の話題なんてない。

探す。ない頭を振り絞って考える。

「…下山君、いる？」

美術部の部長の事だ。

彼の話は何度か聞いたことがある。

ヘタレだの宇宙人だの。

事柴さんはきよとした。

「先輩？ いるけど…呼ぶ？」

初めて嫌そうな顔以外の顔を見せてくれた。

なんかこう、胸が締め付けられるような感じ。

俺は笑って返事をした。

「いや、良いよ。
また明日。」

「先輩、田邊大輔って知ってます？」

「いや、知らないな…」

訳がわからない。

塾も同じじゃなさそうだし…。

そもそも何をしに来たの？

「ああーっ、もう！」

イライラしてきた。

何なの？

何をしに来たの？

部長に用はなかったの？

じゃあ、何で部室前をうろついていたの？

何で…どうしてそんな顔で私を見るの？

何の用もないのにわざわざ来て、微笑みかけてくるのはどうして？

「…わかったよ、タラシだからだ。」

でも、そんなヤツがなんとなく気になる。

そりゃそうだ。

毎日来るんだもん。

「あんたねえ、部活は?!」

「今日はないよ」

「毎日来てるけどさ、何の用？
こっちは暇じゃなーいの。」

田邊が笑った。

「事柴さんと話したい…じゃダメ？」

顔が熱くなって来たのがわかる。

タラシなのに。

他の子にも言ってるだろうのに。

この気持ちは何？

夏休みが間近に迫った。

暑い暑い部室。

そこに佇むのは—：

「何でアンタがいるのよ」

田邊を一睨みした。ヤツは動じない。

「いや、何となく。」

コイツは最近この言葉を真顔に近い表情で言うようになった。

前みたいにヘラヘラしてたら軽くあしらえるのに…。

最近事柴さんがよく相手してくれるようになった。

基本警戒心丸出しの顔だけど、ふとした瞬間に目を丸くしたり笑ったり。

少しずつ「友達」になれてきてる。

出来ればそれ以上の関係になりたいところだが…。

「何、描いてんの？」

「えーっと…」

ホラ、受け答えをしてくれる。
性格上無視が出来ないみたいだ。

「油絵やってんの。」

私あんまり技術ないけど…綺麗な水が描けたらなあって…」

何かを慈しむような目。

最近ホントに色んな表情を見る。

まだ知らない彼女を発見できて新鮮だ。

はっとした。

いつの間にかコイツのペースに乗せられてる。

「ま、田邊には関係ないけどね」

照れ隠しに聞こえる。

部員は興味深そうに物影から見てる。

あー、もう。

暑さのせいで頭が回らない。

何か一緒にいると変な汗も出てくる。

夏だから？

「…っ、早く部活行けば？」

そんな

「口撃」は効かない。

「部活ないもん」

昨日も聞いた。一昨日も。

何だろう、でも田邊といるところ、ふわふわした気分になる。
こんな感覚は初めてだ。

長かった夏休みが終わった。

部活があつたがお互い忙しくて、しかも時間も日にちも一致してなくて会うことは出来なかった。

大好きなはずの夏休みが、今年の夏はただただ憂鬱だった。

「おはよう」

事柴さんに話し掛ける。部室以外での初めての二人っきり。

学校に来るの早いんだ。よし。

事柴さんはこっちを見向きもせず「おはよー…」と言った。

もしかして…

「宿題終わってないってやつ？」

手がピタッと止まった。

静かな教室にシャーペンを置く音が響く。

風のない教室は窓を開けてても暑い。

蝉が鬱陶しいくらいに鳴き続ける。

「意外な…」

続けようとした言葉を遮るように事柴さんが立ち上がった。

またイメージダウンか？

でもいつもこんな感じだし…

ま、事柴さんツンデレっぽいし良っか。

すると彼女は顔の前で手を合わせた。

「お願い！宿題見せて！」

ダメ？と言わんばかりに上目で見てくる。

ズルい。

事柴さんはいつも俺に余裕をくれない。

いつもいつも頭の中は彼女でいっぱいだ。

「良いよ、まあ間違ってると思うけど…」

鞆から宿題を取り出し、彼女に渡した。

顔がぱあつと明るくなる。

「ありがとう！」

おそらく事柴さんに「その気」はないんだろう。

でもいつも見せる笑顔は、自分だけ特別なものだと思いたい。

笑ったり、怒ったり、考え事したり、半泣きになったり、いろんな顔を見せてくれる彼女が好きだ。

本気で好きなんだ。

「∴今日も部室行って良い？」

いたずらっぽく笑う。

「良いけど、私生徒会でいないよ？」

多分、彼女に認められつつある証拠だ。

最近田邊が嫌な存在じゃなくなって来た。

むしろ最近は目で追ってしまっている。

もしかして…

「きーちゃん」

顧問に呼ばれてはっとする。

顧問の小南先生は40歳近いのに爽やかでかっこいい。
学校では私と一番仲が良いらしい。

「うん、どうしました？」

「いや、考え事してた？ピントが合ってなかったっていうか…」

田邊が今日も来てくれるか考えてました、なんて口が裂けても言わない。

「悩めるお年頃なんです」

「はははっ！きーちゃんはホント忙しい人だねえ。
たまには一緒に息抜きしようよ。ね？」

「先生は息抜きしすぎ！もうちょっと頑張ってくださいよ！」

「あははっ!!」

廊下を通ったとき、小南先生と談笑する事柴さんの姿が見えた。

警戒心こそ薄れて来たけど、あまり見ることの出来ない姿。

小南先生は去年担任だったから、出身大学も年上の奥さんがいることも知ってる。

でもどこかで嫌な噂を聞いたことがある。

事柴さんと小南先生が不倫してる、とか。

いやいや、まずない。

あの笑顔は社交辞令だ。そうに決まっている。

でも部室に顔を出しに行く勇気がなくて、今日は珍しく部活に行く

ことにした。

やっぱりか…

少し肩を落とした後はつとした。

アイツは私に気があるわけでもないし、彼氏でもないし、部活も違うんだから来ないのが当たり前じゃん！

それにまだ部活始まったばかりだから来ないとも限らないし…

そしてまた焦る。

私は確実に今、田邊を意識している。

好きなの？そもそも好きって何？

無意識にぼつりとつぶやいた。

「…ホントに悩めるお年頃だわ…」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9900d/>

一生分の恋。

2010年10月8日21時10分発行